

天皇訪中で危惧される 「中華思想」の落とし穴

中嶋嶺雄

三千年来の悪しき「中華思想」の伝統は現代中国の外交思考にも根強く残っている。天皇訪中を朝貢外交にしないための条件を「開かれたアジア」を提唱する筆者が探る。

さまざまな論議があった天皇訪中が目前に迫ってきた。訪中に関して、私は消極的、いわば条件付き賛成と自己規定している。現在の中国情勢、国際関係を分析してみると、時期的には決して天皇訪中にふさわしい環境ではない。天安門事件以降も民主化運動を抑圧し続けている国に、いま、天皇がご訪問されるということが、国際的にどうみられるかということを考えてだけでも諸々の問題が横たわっている。

この八月下旬、現代中国に関する日仏共同研究のためフランスに行った時、着いた日早々のル・モンド紙は、「日中の癒着だ」という論調の記事を載せていた。フランスの中国研究者たちからも、どうしていま天皇が中国に行かなければな

らないのかという質問攻めにあった。民主化運動に立ち上がった学生や知識人を受け入れてきた彼らに対して、消極的賛成の私ですら弁明につとめなければならぬ状況におかれた。この時、改めて天皇訪中は時機尚早であり、もっと慎重な考慮が必要だと実感したのである。

「条件付き」という立場をとっているのは、国際化時代を迎えてきた日本に、PKO問題にしてもある種のコンセンサスができ始めているこの時期に、国民心理に大きな亀裂と分裂をもたらす結果を虞_{おそ}わっていたのだ。

ただし、外交の常職からすれば、今年一月の渡辺外相の訪中以降、すでに日中間の外交上の懸案として日本側がコミッ

なかじま みねお



東京外国語大学教授、一九三六年長野県生まれ。東大大学院修了、社会学博士。国際関係論、現代中国学が専門。文化大革命を権力闘争の大衆運動化と分析、一貫して批判姿勢を変えなかつた。著書は『現代中国論』『中ソ対立と現代』、『北京列列』『リヴォフのオペラ座』など多数。

トしていた。しかも、江沢民総書記が来日、天皇への直接要請に宮沢首相が積極的姿勢を示すなど、日本としては要請を断れず、十月二十三日へ向けて突っ走ったのだろう。こういう状況になってしまったことは、逆にいえば中国の対日政策が非常に巧妙だったということになる。

現下におよんでは、日中関係に新機軸が展げる機会になることを期待するしかない。だが、本来、「皇室外交」はあつてはならないことを特記しておきたい。友好親善に徹し、開かれたアジアのとば口となるためには、中国以外のアジア諸国にも天皇が訪問されるような環境を培っていくべきである。

しかし、前述したように多くの問題がペンディングになつたままでの訪中である。例えば、中国は民主化抑圧のみならず軍事力を増強して南沙群島、尖閣列島、日本近海、沖縄近海にまで影響力を求め、覇権主義、膨脹主義的な姿勢を崩さず、世界が軍縮の方向にいつている時代に背を向けている。

この一例だけでも、特に東南アジア諸国は、政治大国である中国と経済大国である日本が密着するのではないかという懸

念を強めている。

いま、世界的に民意の動向が非常に重要になってきている。かのソ連でさえ、民意の求めに応じて独裁体制を崩さざるを得なかつた。その後の混乱は歴史の流れに委ねるとしても、多元的な価値観が存在し、民意に基づいた政治が行われることは二十一世紀を迎えようとするグローバルな時代には必然的なことである。環境問題もいまやイデオロギーの問題ではなくなり普遍的なものであり、自由で多元的な言論が許されることも人類の普遍的な価値である。日本は西側の一員であるならば、これらのことを国境を越えた義務として自らの立場を明確にすることが肝要であろう。

「中華思想」と「事大主義」

こういう前提のもとで、天皇訪中に対する中国側の出方、外交的なストラテジー、体質を考察してみると、その自己中心的な態様からして、言葉こそ違え、当然、日本の天皇も挨拶にくるべきだという誘いがあるのではなからうか。これは、まさに中華思想の片鱗を窺わせるものである。したがって、「中華思想」とは何なのかということを十分に分析しておかなければならない。

中華思想の根底は漢民族の文化的優越性であり、中国三千年の歴史のなかで根強く生きている。古代の中国では漢民族

以外は夷狄^{いひて}で、東夷・南蛮・西戎^{せいじゆう}・北狄^{ほくてい}という呼び方をもって自民族の優越性を誇示し、夷狄蛮戎^{いひてばんじゆう}という言葉もある。優れた文化を持つ漢民族は一段と高いところに位置し、いわば文化的な優越性、あるいは天下国家は中国を中心に回るといふのが中華思想である。本来、こうしたエスノセントリズム（自民族中心主義）は革命国家、社会主義の論理では打破されてしかるべきものだが、中華人民共和国は中原に華咲く共和国という国名からして、依然として中華思想の体質を持ち続けている。毛沢東時代には毛沢東思想が世界を照らすといふ、今日の鄧小平の対外姿勢にも中華思想が色濃い。

中華思想は中国の伝統思想というより民族的な体質と考えていいわけだが、中国の場合、中華思想を中心とした対外関係のシステムが顕著に存在している。こうして中国の世界観には中華思想が中核として存在してきたし、現在でも存在していると断言していい。

中華思想がメダルの表とすれば、裏側にあるのが「事大主義」である。事大主義とは、白髪三千丈というように非常におおげさな表現をするだけでなく、強いものには服従し、弱いものには徹底的に優越性を誇示するという側面がある。漢民族の歴史の中に培われた王朝権力の外皮とも言えよう。北京にある紫禁城（故宮博物院）は世界の遺物としては類い希な存在だが、このような官廷の建築様式そのものも中華思想と事大主義によって導かれているような気がする。

中国には物事を常に二元的に考えるという発想が根本にあり、絶対に手の内を見せない。物事の表と裏、本音と建前が徹底している。こういう発想は、紫禁城を見ても明らかだ。巨大な天安門があり、反対側に地安門がある。正面の天安門から入ると中にまたひとつ端門という大きな門がある。さらにその奥に午門という大きな門がある。だが、次に何があるのか外からは見えない。まだまだいくつかの門があつて、しかも、皇帝がいる中心にはなかなか近付けない。やがて、太和殿があり、そこが紫禁城の中心である。ここに至って中華思想は極まれりという感がある。そこで種々のセレモニーが行われるのだが、さらに皇帝が住む乾清宮があり、まさにそこが官中なのである。ここまで待てるには、中国にたくさん貢ぎ物にしても、中華思想の階層秩序に迎え入れられた、ごく近親の属国として認められなくてはならない。

こういう、「中華思想」と「事大主義」をメダルの表と裏にする中国の伝統思想、伝統意識に基づく世界秩序を「チャイニーズ・ワールド・オーダー」（中国的世界秩序）と呼んでいる。この中国的世界秩序が今日の中国との外交を考えるうえで非常に重要なポイントになってくる。

中国は百数十カ国と国交を樹立しているが、国交樹立の儀式はすべて相手国の最高指導者を北京に呼び付けて行ってきた。二十年前、田中元首相も国交回復を実現させたのだが、一国の最高執政者を自分の居室に入れるということは、既に

相手は子分であり、手下であり、中国に忠誠を誓えという認識である。国交樹立ではなかったにしても、ニクソン元米大統領もやはり北京に飛び込んで行った。本来、外交はレシプロシティ（平等互恵）でなければならぬものである。だが、建前として平等互恵を唱える中国は、自ら相手国の首都に行つて国交樹立をした例はない。観点を変えれば、中華思想や事大主義に関して無自覚であれば、中華思想にはおのずと吸引されてしまふ魅力があるといえよう。文化も歴史も古い国であれば、そこに引き付けるものがあつて当然だが、現代中国は社会主義国家であつて、その社会主義によって引き付けられるものは何もない。

「五服説」にはじまる

中国的世界の形成

こうした、中華思想と事大主義に基づくチャイニーズ・ワールド・オーダーは、「五服説」という古代中国人の伝統的な国家観（世界観・天下観）と関連がある。世界の中心としての中華、その周辺には都から五百里ごとの距離にしたがつて中華王朝に服従すべき国々が五つのランクに区分されていた。そして、その距離に応じた親疎の度合いによって、中華帝国への朝貢の回数が異なつており、そして同時に中華帝国による支配、統制ないしは支援の濃淡が決まるというものだった。「五服説」というのは、もともと、伝統的な中国社会

の家父長的な体制の親族制度であつて、それによると五等級の服喪の制度があつた。例えば父親に対しては三年間、父の兄弟にたいしては一年、従兄弟には九カ月というふうに、親族間の親疎、遠近関係によって異なる服喪期間が定められていた。こういう中国の古代以来の五服説が、やがて中国的な世界観と繋がり、中華思想あるいは事大主義と繋がつて、チャイニーズ・ワールド・オーダーという階層的な世界秩序を形成していった。これはヨーロッパと非常に違ふところで、ヨーロッパは、ウィーン会議以来、あるいは十七世紀中葉のウエストフリア会議に遡つて平等な国家関係（ヨーロッパ・ステート・システム）が生まれたが、アジアでは、中国が中心で、それに従うという垂直的な階層秩序が国際関係の基本だった。もともと家族制度だった五服説は、中華思想として、漢民族の住む中国とその周辺の異民族との関係を示す秩序となり、やがて日本、朝鮮、琉球やヴェトナムを含む周辺諸国全体におよんでチャイニーズ・ワールド・オーダーが形成されてきた。朝貢貿易というのはまさにそこにあるわけだ。貢ぎ物の中身によってランク付けをするという体質があつた。こういう体質があるからこそ、ヴェトナムの例にみられるように、中国の意に沿ふ限りにおいては支援し、ひとたび意に反すれば徹底的に制裁してきた。中越戦争（一九七九年）で、鄧小平が「ヴェトナム制裁」を行ったことは記憶に新しい。制裁とは、常に自分が正しくて一方的にムチ打つて懲らしめることだが、こういうことを中国は平気でやっ

てきた。だから、ヴェトナム側から見れば反「覇権」を唱える中国こそ、まさに「覇権国家」なのである。これらの歴史をみると、中華思想に立ち打つことは簡単ではない。

しかも、鄧小平はあらゆる公職から引退しているにもかかわらず、依然としてツルの一声（一言堂主）の影響力もっている。このような鄧小平の存在自体、というのは憲法も党規約も無視しているわけで、まさに人治であり、権威による統治であり、そして、まさに皇帝型の権力である。

「西側諸国の一員」の立場を明確に

現在の鄧小平が皇帝であり、中華思想があり、皇帝型権力構造であるがゆえに、日本の皇室に対する認識も違ふのだ。

中国の若い世代のなかには、天皇は日本国民の象徴であるという正しい見識もあるが、鄧小平らの世代は、由緒ある日本の皇室が招かれて行くということは、何よりの賜物だと見做すはずだ。中国が国際社会で孤立しているだけに天皇の訪中を待ち望む思惑は察するに余りあるが、これらの問題を見ると、中国独特の政治文化（ポリティカル・カルチャー）やストラテジーがあることを十分考慮しておかなければ西側諸国からは日本が中国と癒着すると見られるだけでなく、日本が中華思想のチャイニーズ・ワールド・オーダーの中に組み込まれるという形になりかねない。ここが、今回の天皇訪中に関して十分注意しておかなければならない点である。

そうした「朝貢外交」にしないためにいくつかの条件を考えてみよう。先述したように、日本は人類の普遍的な課題については国境を越えた義務に忠実にならなければならない。いまや日本はこれからの世界を担っていかなければならない。大きく重要な存在になっている。そうした日本は、二十世紀にかけての一種の民意に基づく政治、多元的な価値観の存在、自由な経済など、全人類的な普遍的課題に対して、西側諸国の一員としての立場を明確にすべきだ。第二点は、かつて辛酸をなめたアジア主義に陥ってはならない。グローバルイズムに立脚し、全人類的な課題を見詰める広い視座から日中関係を考えていくという外交理念を明確にすることが必要だ。第三には、従来の中国と日本との関係をみると「友好」が建前だった。いわゆる「日中友好外交」というのは、教科書問題、靖国問題でもつねに政治決着がはかられてきたように、できるだけ相手を刺激せず、中国の意を尊重するという結果を招くものだった。これでは、中国自身の中華思想なり事大主義を助長することになってしまう。中国に対して、いふべきことははっきりいふ必要がある。鄧小平がツルの一声で国を牛耳る前近代的な体質では中国に本当の近代化は訪れない。だが、民主化を求めた学生や知識人のあいだに中華思想や事大主義から訣別しようという芽が、中国の歴史が始まって以来初めて出てきたことは光明だ。チベット問題にみられるように、自分たちが民主化を求めるのならチベットの人の痛みも知らなければいけないという意識が民主化を求

める学生や知識人の間に出はじめたことは、萌芽とはいえず非常に重要である。漢民族自身が、明らかに歴史も文化も言語も民族も違うチベットの問題を考えはじめたことに大きな意義がある。台湾は民主化が進み、政治改革も断行して経済的にもたいへん発展している。台湾の中国人のあいだにも中華思想、事大主義はあるわけで、それらとの格闘の結果、開かれた方向に歩みはじめている。

開かれたアジアを探る

中華思想の歴史的伝統は無視できないが、いまそれが初めて崩れようとしている歴史的に岐路にある。こうした中国の情勢を幅広い視野でとらえて日中関係を考えていかなければならない。そういう意識なしに日中関係をみてみると、日本は情緒的にアジア主義の殻に閉じこもってしまい、世界の理解は得られない。これらのことを天皇訪中の機会に明確にし、そして今日のアジアにある政治の壁を乗り越えて、新しいアジアを作っていくという方向を探るべきではなからうか。中国自身も閉鎖的な思考を打破していかなければ自らのためにならない。中国は、まさに中華思想と事大主義によって近代化が遅れたのである。

日清戦争以前、日本は中国から見ると東海の弱小国で、中国は強大な国だった。しかし、伊藤博文が清国の全権李鴻章との下関条約の交渉で、日本はヨーロッパ列強と対抗するた

めに、ここまで、徹底的に捨て身になって近代化を模索した、それなのにあなたがたはどうしたのかと質した際、伝統に縛られているのだと、李自身が告白した。当時から、中華思想の呪縛によって近代化ができないということをいっていたわけだ。

西太后は、「汽車、汽船は孔子様の乗り給わざるものなりき」と、西洋的な科学技術や近代文明の象徴であるものはいらない、中国には孔子様さえいればいいといい、中華思想や事大主義を国家的な哲学である儒教と結び付けて非常に強固なものにして自らを縛ってしまった。そういう中国は革命後も依然として世界の中で中国がすべてで、毛沢東思想は世界を照らし、文化大革命は歴史的な壮華であるという立場をとってきた。そのツケが、今日の中国をもたらししているのだ。こうした中華思想や事大主義を自ら打破するという意識を中国が持つようにならなければ本当の近代化はできない。その意味でも、非常に情緒的に対話をして中国を刺激しないように、日中友好第一という外交姿勢は、日本が中華思想の落とし穴にはまるだけでなく、中国自身も中華思想の落とし穴の深みにはめ込んだまま、そこから脱却できないことに力を貸すことになりかねない。

その意味でも今回の天皇訪中は、従来のような、いわゆる「日中友好」のためではなく、徹底的に開かれたアジアを作るための一つの機会にしていかなければならない。今まさに日本は大きな岐路に立っている。